

# 尾崎一雄作品における蜜蜂の登場理由とその役割

河内 秀斗

## はじめに

尾崎一雄は大正から昭和期を代表する私小説作家である。彼の著作において、最も特徴的なことは昆虫を題材とした作品が多いことである。また、単に作品数が多いだけでなく、それらのなかには「虫のいろいろ」のように、外国語に翻訳され、国際的に読み継がれているものも存在しており、その評価も高い。尾崎はさまざまな昆虫を題材に用いたが、そのなかで最も注目すべき存在は蜜蜂であろう。彼のデビュー作である「二月の蜜蜂」<sup>二</sup>は、タイトルの通り蜜蜂を扱った作品であるし、晩期には「蜜蜂が降る」<sup>三</sup>、「居据った蜜蜂」<sup>四</sup>、「だんだんと覺がつく」<sup>五</sup>、「蜂と老人」<sup>六</sup>といった数多くの蜜蜂作品を執筆した。

「二月の蜜蜂」のあらすじを説明する。これは尾崎が妹のセイの死去をもとに執筆した作品である。物語は、隣家のY家で行われている養蜂を「私」が眺めている場面からはじまる。「私」が蜜蜂たちをしばらく眺めていると、一匹の働き蜂が倒れた蜂を抱えて巣から出て来て、どこかへ飛び立ってしまった。これは年老いて倒れた蜂を巣から追い出すという蜜蜂たちの習性であり、そのことは「私」

も知っていた。一見すると残酷な場面だが、「私」は「然し、殺された彼等は、兎に角爲すべきことをしてゐるのだ。二十で死んだ妹の美枝は——」と、蜜蜂たちは妹よりも充実した生を全うしたと語る。ここから「私」は病床で寝込む美枝の生前の姿を思い出していく。ここまでが物語の前半部である。後半は、再び「私」がY家の養蜂を眺めている場面からスタートする。ここで、Y家の主人は蜜蜂に刺される描写がある。Y家の主人は蜜蜂の攻撃について「滅多に刺しはしませんよ。刺せば死ぬんだってことを先生達知ってますからね。それだけにまた刺されると——やア痛いですよ」と語る。ここで「私」は再び「それが善いことか悪いことかは知らず、今私は妹の追憶から、あの蜜蜂の刺針の一撃に比すべき性急な痛みは感じない。（中略）私の頭の中の美枝は、此頃自由な起き伏しをする。その一つに——」と美枝の追憶を始める。美枝の成長についての場面と、大雪の日に美枝を迎えに行く場面が描かれる。最後に美枝の友人であったK子の死について書かれ、物語は終わる。「蜜蜂が降る」、「居据った蜜蜂」、「だんだんと覺がつく」、「蜂と老人」という後期の蜜蜂作品では、それぞれの作品で、尾崎の家にやって来た蜜蜂たちその時の様子について書かれている。最初に

「蜜蜂が降る」で、尾崎が妻と暮らす下曽我の家に蜜蜂の大群が飛来する。次に「居据つた蜜蜂」で、蜜蜂たちが家の庭にあるタマグスの木のウロに住み着いたことが明かされる。「だんだんと鳧がつく」ではそこにスズメバチが襲来し、蜜蜂たちが全滅する様子が描かれる。「蜂と老人」では、蜜蜂が絶滅した後、同じタマグスの別のウロに住み着いたスズメバチが市役所職員たちによつて殺虫剤で撃退される様子が書かれている。

尾崎が作品の題材に昆虫を用いた理由を探る研究というのは、これまで行われてきた。しかし、尾崎が作品の題材として蜜蜂を多用した理由についての研究となると多くはない。渡辺孝が『ミツバチの文学誌』でその理由について、近代養蜂の広がりとの関連を指摘し、唐井清六が『蜂と老人』(尾崎一雄)<sup>ハ</sup>で「蜜蜂が降る」、

「居据つた蜜蜂」、「だんだんと鳧がつく」、「蜂と老人」の蜂が扱われている場面について説明したうえで、「蜂の出没に呼応して、次々と書かれていった、いわば蜂シリーズとも呼ぶべきこれらの作品群は、こうしていちおう終わりを見るのである。尾崎の処女作がやはり蜂を扱った「早春の蜜蜂」であつたことははじめにふれたが、これがいまのかたち(現在は、大正十四年、『主張』発表時の「二月の蜜蜂」の題名になっている)に落ち着くまでに、作者は何度も改作、改題をかさね、悪戦苦闘をくりかえした、それに反して、七十歳代後半に入つて、折々に書きつがれていったこれらの何遍かの蜂をめぐる作品の、なんとこのびやか、闊達自在に展開している」とか、わたしはそのことに注目する。そこにはなにか達人の境地を思わせ

るものがある。老境を待つて拓けた新しい世界であるかもしれない」と、「二月の蜜蜂」と後期蜂作品の相違点について述べているが、両者とも尾崎が蜜蜂を題材とした理由については言及していない。本稿ではなぜ尾崎が蜜蜂を小説の題材として多用したかについて、尾崎の蜜蜂作品のなかでも特に重要と考えられる「二月の蜜蜂」を中心に考察していく。「二月の蜜蜂」を中心的に扱う理由は、「二月の蜜蜂」が尾崎の作家活動の方針が決定された作品だからである。本稿での考察によつて、尾崎の蜜蜂を扱った作品への新たな読み方を提示することを目指していく。

## 一 「二月の蜜蜂」における日本古典文学の受容

尾崎の最初の蜜蜂作品はデビュー作の「二月の蜜蜂」である。この作品は、その後の尾崎の作家活動の主題が掲げられた作品でもある。唐戸民雄は「尾崎一雄(独自性)の獲得——「二月の蜜蜂」と「暢気眼鏡」を中心に——」<sup>九</sup>で「あんなにも死ぬのを厭がつてゐたのだ」そして婚約まで出来てゐたのに——かう思つてくると私はカッとなる。眼に見えぬ、無法極まる何物かに対して、猛然とつかみ掛ろうとする。運命などと言ふ單純な言葉で到底説明し得ぬ(何か)が蠢いているのを感じ取る。何処へ向かつて叫んだらよいか。また、叫んでみたところで、「その無法極まる何物か」は耳を傾けてくれるのかさえ判らない。(私)の心の奥底には明瞭な形を持たないが、抑えきれない確かな(憤り)が沈殿して行く。そして、「得

体の知れぬ何物」かに対する（憤り）は尾崎の心中を決して去ることなく、その正体を見極める為に創作活動が続けることになるのである。尾崎は生涯を懸けて追及する、若しくは追求せざるを得なかった主題を処女作「二月の蜜蜂」において獲得したのだ」と、尾崎作品のなかでも「二月の蜜蜂」が重要な作品として位置づけられると主張している。また、「二月の蜜蜂」で特徴的なのは、前章で少し言及したように、「私」が蜜蜂の観察を通して、妹の死を追憶していくという描写である。本文からその場面を引用し、【場面一】と【場面二】として次に示す。

#### 【場面一】

「こゝへ来てごらんなさい、煽風をやつてる」Y氏が云つた。巢の入口に、二十四ばかりの働蜂が、不規則に並んで、一斉にこまかく羽根を動かしてゐる。尻を上げて外に向け、足を延ばし、も少し強く羽根を動かしたら飛び立ち相な恰好をしてゐる。

「うまいことをやるでせう、換氣法なんです」

暫くして煽風は終つた。みな、ぞろぞろと中に入つてゆく。とそれと入違ひに一匹の蜂が斃れた同類を惹いて出てらゐた。さうして一寸見構え下手と思ふと、それを腹の下に抱経て、ぶーんと羽音をさせて飛び立つた。巢の掃除を始めたな。私は思つた。年若い斃れたものは、かうして外に運ばれて、相當の距離の所で空中から落される。それはY氏から聞いて知つてゐた。役に立たない老蜂は、若い者たちが噛み殺して了ふ、働いて働いてその巢に自

分達の子孫の爲に殺されて了ふのだ、と云ふことをきいてゐた。然し、殺された彼等は兎に角すべきことをして了つてゐるのだ。二十で死んだ妹の美枝は——私の考へはともすればそこにと落ちて行くのであつた。

#### 【場面二】

突然手帳を持つた左手が、額のところを拂つたと思ふと、Y氏は顔をしかめて、「やられた」と云つた。

「何しろ命がけで刺すんだから——」と云ひかけ、菜園をへだてた住居の方を向い手、肚の好い中音をひゞかせた。

「オーイ、やられたんだよ、早くアンモニアだ！」

陽當りの好い縁側に、赤い色の多い縫物を擴げてゐた若い細君の姿がハツと立ち上つた。

「滅多に刺しはしませんよ。刺せば死ぬんだつてことを先生達知つてゐますからね。それだけにまた刺されると——やア痛いですよ」

Y氏は、手搜りで自分の額からそこに残された刺針を抜きとると、見ろ、と云ふ風に私の前に差し出した。私はそれを左の手の掌に受けた。根本に白い肉を附けた一分ばかりの鋭い刺針が、微かに動いてゐる。氣をつけて見ると、その母體を離れた刺針は、微動する度に、極めて僅かづゝ掌の皮を破つて潜入してゆくのである。私は、それに見入つた

（中略）

それが善いことか悪いことかは知らず、今私は妹の追憶から、あの蜜蜂の刺針の一撃に比すべき性急な痛みは感じない。時が自然にさうして呉れたのか、知らずく自らを処理し得たのか、それさえ今は罰としない。だが、私は、美枝は憶ふ。私はもう頭を振らない。嘗てはきりと振った――が、今は振る必要がない。三年経つて美枝も落付いた、さう私は戒ずる。私は頭の中の美枝は、此頃自由な起き伏しをする。

「二月の蜜蜂」で、尾崎が文学活動を始めるきっかけとなった妹の死を、【場面一】【場面二】のように蜜蜂の行動と重ね合わせていることは非常に興味深い。なぜ妹の死と蜜蜂を重ね合わせたのか。そこには前掲の渡辺孝『ミツバチの文学誌』で論じられていた蜂に対する古代人の観念が影響していると考えられる。

渡辺の『ミツバチの文学誌』は蜜蜂の登場する文学作品を時代、地域を問わずにまとめて、それらを紹介している書籍である。この書籍で渡辺は、芥川龍之介の「老いたる素戔鳴尊」<sup>10</sup>という短編を取り上げる。渡辺の前掲書で説明されているあらすじを引いてみると、この作品は『古事記』を題材にしたもので、大国主命が素戔鳴尊の須勢理姫と結婚するために、素戔鳴尊より課された試験に挑戦し、そのとき須勢理姫に差し入れられた蜜蜂のヒレと蛇のヒレによって命を救われ、結果試験に合格し須勢理姫と結婚するという物語である。このとき、蜜蜂のヒレが霊的な力が宿った道具として扱われており、ここから渡辺孝は次のような古代人の蜂に対する観念を

導きだしている。

いずれにしても、この物語から古代人たちの蜂に対する観念がほぼ推察される。それは「畏れつつしむべきもの」というイメージである。新井白石など『東雅』の中でハチという言葉を分析して「ハ（羽）＋チ（霊）」と解釈したが、これは古代精神を正しく掴んだ見方だと思われる。つまり、古代人にとってハチとは「羽を持った霊妙不思議な昆虫」だったわけである。

また、渡辺はこの書籍で日本文学作品にはじめて蜜蜂が登場したのは『日本書記』で、百済の太子、余豊璋が三輪山に蜜蜂を放つ場面であると指摘する。渡辺はその余豊璋の行為も、古代人の蜂に対する観念が表れていると主張している。

では余豊璋は何の目的でミツバチを三輪山に放ったのであろうか。ハチミツを採るためというのは、おそらくあまりに近代的な解釈であろう。この場合、見逃せないのは、ミツバチを放った舞台が三輪山だという点である。三輪山は古代では最も神聖な山だった。この古代信仰の中心地に神聖な昆虫ミツバチを放ったのは、何事かを三輪山の神に祈りかける意図からだったと思われる。ミツバチを通じて神意が開示される。ミツバチが首尾よく繁殖すれば瑞兆だし、育たなければ凶兆だというような一種の占いが古代には行われていたのではないだろうか。

さらに、『十訓抄』にも古代人の蜂に対する観念が現れた説話が収録されていると渡辺は主張する。渡辺が前掲書でまとめたあらすじを引いておくと、ある時余古大夫という武將が、戦で敗れて初瀬山という山へ逃げ込んだ。彼はそこで、蜂が蜘蛛の巣にかかっているのを助けてやった。するとその晩、余古大夫の夢に一人の男が出て来て、自分は昼間、蜘蛛の巣にかかっていると助けていただいた蜂であり、そのお礼に余古大夫の仇をとると言う。余古大夫は男に教えられた通り、わずかに残っていた兵を集め、敵に攻撃を仕掛けるが、そのとき蜂の大群が加勢にあらわれて、余古大夫は戦に勝利することができたという話である。この説話について渡辺は『十訓抄』は結論として、「すべての蜂は形小さきものなれど、仁智の心ありといへり」という教訓を引き出している。儒教的な表現はとっているものの、ここにもやっぱ『古事記』以来の神秘的なミツバチ観が流れているようである」と結論づけている。尾崎は渡辺が指摘する「蜜蜂は霊が宿る生き物である」という、古代人の蜂に対する観念を持っていたのではないだろうか。彼は「二月の蜜蜂」で蜜蜂を妹の霊が乗り移った生物として登場させているのではないだろうか。また、渡辺は、宮沢賢治もやはり、妹を亡くした後

蜂が一匹飛んでいく琥珀色工の春の器械 蒼い眼をしたするが（中略）ここには妹トシの名前は出て来ない。しかしこ

の前に「青森挽歌」とか「オホーツク挽歌」がつづき、そのいずれにも「とし子」が登場するところから見ても、明らかにこれは「蒼い眼をしたするが」（ずがるは蜂の古語であり、東北方言はとし子の化身といつてもよい。もともと賢治の詩には、ミツバチはそれほどひんぱんに出て来るわけではない。その賢治が突然「鈴谷平原」の冒頭でミツバチをうたい出すのである。彼がこのミツバチの中にとし子の姿を見たとしても、ふしぎではないだろう。

宮沢賢治もまた、蜂をとし子の魂が乗り移った生き物としてみなしている。この「鈴谷平原」は詩集『春と修羅三』におさめられた一詩である。『春と修羅』が発表されたのは一九二四年であり、尾崎の「二月の蜜蜂」が発表される一年前である。よって、一九二四〜一九二五年ごろまで、渡辺の主張する古代人の蜂に対する観念は日本に残っていたと推測が成り立つ。しかしながら、尾崎は本当に古代人の蜂に対する観念を会得していたのかという疑問が残る。この疑問を解決する尾崎自身の発言<sup>三</sup>がある。

ぼくんとここにはおやちの商売上、国文や国史関係の本がたくさんあつたんですよ。『国書刊行会本』なんかみんな揃つてたし、『大日本古文書』や『大日本史料』などがみんなあつた。さういふのは、ぼくにはあまり足しにならなかつたけれども、『群書類従』とか『国史大系』とか『史籍集覧』とかいふのがよかつた。

「古事記」や「日本書記」をはじめ、「大鏡」「増鏡」「水鏡」などいはゆる「三鏡」などが全部入つてた。一番面白かつたのは、「古今著聞集」「十訓抄」「今昔物語」それに「日本書異記」かな。かういふのをぼくは中学生時分から読んでた。

尾崎は神職を家業とする家系であつた。そのため『日本書記』や『十訓抄』などの、古代人の蜂観が表現された物語や説話が収められた古典文学作品を読む機会に恵まれていたのである。尾崎はそういった機会を生かして、古代日本人の蜂に対する観念を手に入れたのではないか。「二月の蜜蜂」で、蜜蜂は亡くなったセイの存在を強調する役割を果たしている存在であり、尾崎もそれを意図して作品に蜜蜂を用いたと考えられる。

それでは、尾崎が「二月の蜜蜂」で蜜蜂を題材に用いたのは、古代人の蜂に対する観念を彼が持つていたことのみが理由なのだろうか。尾崎が作家として活動していたところに、同じく蜜蜂を小説の題材に用いた作家たちがある。次章では、他の作家の蜜蜂作品との比較から、尾崎が「二月の蜜蜂」で蜜蜂を題材に用いた理由を明らかにしていく。

## 二 日本近現代文学の蜜蜂作品と「二月の蜜蜂」の比較

日本の近現代文学作品において、蜜蜂を扱った作品は何作か執筆されている。渡辺孝は前掲書で現代文学における蜜蜂を扱った作品

として尾崎一雄の作品、水上勉の『鶴の来る町』<sup>四</sup>、吉村昭の『蜜蜂乱舞』<sup>五</sup>、三島由紀夫の作品を取り上げている。渡辺は現代日本文学作品に蜜蜂を扱ったものが多い理由について、日本の養蜂の発達との関連性を指摘する。渡辺の指摘の通り、「二月の蜜蜂」でも、尾崎は隣家の養蜂を眺めており、水上勉の『鶴の来る町』、吉村昭の『蜜蜂乱舞』も養蜂がテーマとなっている。しかし、日本現代文学における蜜蜂作品を比較すると、共通点は養蜂のみでなく、作家たちが注目した蜜蜂のある特徴にも存在するように思われる。本章では、尾崎一雄の作品、水上勉の『鶴の来る町』、吉村昭の『蜜蜂乱舞』を比較し、作家たちが共通して注目した蜜蜂の特徴を明らかにして、尾崎が「二月の蜜蜂」に蜜蜂を用いた理由を、一章とは別の視点から明らかにしていく。この『蜜蜂乱舞』『鶴の来る町』と「二月の蜜蜂」の比較は、渡辺の前掲書では行われていない試みである。まず、尾崎以外の作家の作品を見ておこう。渡辺の前掲書から、吉村昭『蜜蜂乱舞』のあらすじを引用する。

小説の主人公は鹿児島県鹿屋市在住の有島伊八郎というベラン養蜂家で、養蜂組合の組合員長をつとめている。ファースト・シーンは、その伊八郎が同業者の木村の息子の結婚式に出席して感慨にふける場面である。新郎の息子は忠実に父親の仕事を受け継ぎ、中学のころからミツバチになじんで養蜂にいきしんでいる。後継者に恵まれた木村は幸せな男だと伊八郎はしみじみ思う。それに比べてこのおれは、と彼はわが身を振り返る。彼には俊一と

いう息子があつた。俊一は学校の出来もよく、高校を卒業して東京の農科大学へ進学して養蜂を研究したいというので、学費を捻出して入学させたところが、一年半ほどしてから音信不通になつてしまつた。驚いた伊八郎は大学へ問い合わせたところ、俊一はすでに退学してしまつたという。それからすでに三年になるが、杳としてゆくえが知れない。もしも建材なら、二十四歳になるはずである。

俊一の下には、高校二年生の典子がいる。そして三年前から養蜂を志す清八という青年が伊八郎の家に住み込みで働いている。彼は貧しい農家の三男で、中学しか出ていないが、頭がよく誠実な若者なので、ゆくゆくは典子と結婚させて家業を継がせようかと伊八郎は考えたこともあつたが、それにしても俊一さえいてくれたらと、彼の思いはいつもそこへ戻つてゆく。

ところがその俊一が帰つて来たのである。しかも見ず知らずの女を連れて――。彼は妻だといつて父に若い女を紹介する。彼女は「弘子です。よろしく願ひします」と挨拶したが、伊八郎の腹の中は、身勝手すぎる俊一の行動に煮えくりかえつてゐる。しかし妻の利恵のとりにしで怒りをおさえ、長男夫婦は家族の一員として迎えられる。弘子も都会育ちの女性にしては忍耐強く、慣れない養蜂の作業に従事するようになる。小説全体は、この異分子として迎えられた弘子が、旅から旅への転地養蜂の中でしだいに家族に溶け込み、俊一も伊八郎の後継者として育つてゆく過程を印象的に描いてゆく。

続いて水上勉の『鶴の来る町』のあらすじを説明する。主人公は鹿児島県で料亭を営む島本かね子という女性である。ある日、渥美刀禰吉という養蜂家が雪子という一人娘をつれて店にやつて来た。かね子が話を聞くと、刀禰吉の妻は肺結核で亡くなつてゐるという。刀禰吉父子はその後も来店し、かね子は次第に刀禰吉に心惹かれていく。ある日、かね子は店を休み、刀禰吉の養蜂場を訪れる。養蜂場の美しい光景を眼にし、刀禰吉から蜜蜂の世界の素晴らしさを聞き、彼女は蜜蜂のとりことなり、同時に刀禰吉親子と共に暮らしていきたいという気持ちが生じたことを自覚する。これがきっかけでかね子は刀禰吉と結婚する。その後、刀禰吉が千葉の安孫子駅から、転地先の北海道の倶知安駅へ蜂を移送する際に事件が起こる。丁度その頃、労働ストライキが全国各地で起こつてゐた時期であり、刀禰吉の蜂たちを乗せた貨物列車もその影響を受けてしまつた。刀禰吉の蜂たちは安孫子駅から倶知安駅に到着するまでに七日間も日数がかかつてしまつたのである。そのため蜂たちは全滅し、それを知つた刀禰吉はショックのあまり、精神を病んでしまふ。その後、かね子が国鉄を訴え、損害賠償を得ようと奮闘するが、結果的に賠償を得ることはできないままとなる。その後、刀禰吉は発狂の末に亡くなつてしまひ、残されたかね子と雪子は九州に帰つていき、物語は終わる。

これら二作品の共通点は何だろうか。それは両作品ともに人間社会の不完全性がテーマとなつてゐることである。水上勉、吉村昭

は人間社会の不完全さを、蜜蜂の特徴である秩序立った社会と比較することで、より際立たせて表現しようとしたのではないか。このような視点から『蜜蜂乱舞』『鶴の来る町』を再び考察していく。『蜜蜂乱舞』では伊八郎たちが暮らす有島家にやってきた俊一と弘子を受け入れる有島家との関係性が物語の核となっているが、ここに、この作品における人間社会の不完全性を見ることができ、その場面を次に引用する。

俊一がもどつてきてくれたことは嬉しかったが、若い女のことを思うと気が重くなった。女についてなにも知らないし、それを嫁として家に迎え入れることが不安であった。湯槽からでたかれは、全身に石鹸を塗りたくつて浴用タワシで皮膚をこすった。浴室の外に人の気配がして、ガラス戸がひらいた。黙ったまま利恵が入ってきて、タワシを受けとると、かれの背中を流しはじめた。「どうしたらいいんです。あなた」利恵が低い声で言った。「叩き出したいくらいだ」かれは、声を荒らげた。「そんなことはできませんよ。俊一も出て行つてしまします」「俊一も一緒にだ」「なにを言うんです。癪癪など起している場合じゃありませんよ」利恵が、非難するように言った。利恵は、伊八郎の胸中を見ぬいている。荒い言葉の口にはしているが、俊一の帰宅を喜んでいることを知っている。「馬鹿なやつだ」かれは、体に湯をかけると、再び湯槽に身を入れた。利恵は、足をタオルでふくと浴室の外に消えた。

本来ならば家族である俊一が戻ってきてくれたことは歓迎すべき事態である。伊八郎は俊一が家業を継いでくれることを願っていたわけであるから、俊一と弘子を受け入れることは有島家にとつても最良の選択であると思われるが、引用部のように、伊八郎はそれにかんがりの抵抗を感じている。こういったところが人間社会の不完全な点であろう。蜜蜂のように、集団の利益を第一に考えていれば、俊一と弘子を受け入れることにためらいはないはずである。しかしながら、現実の人間社会はそうはいかない。伊八郎の俊一に対する怒りや、弘子に対する不安といった感情が最良の選択の邪魔をするのである。また、この作品では伊八郎自身が自分達の現状と蜜蜂たちを重ね合わせている場面がある。

亡父利太郎の伊八郎に対する態度は、厳しさに徹したものであった。まず亡父は、かれに家庭の和を専一に心掛けるようにとしはしと言った。「蜂を見ろ。あのように無数の蜂がせまい巢に同居していながら、秩序正しい生活を送っている。それは、互いに力を合わせて生きているからだ」伊八郎は、父が病死してからもその教えを守ってきた。酒を飲むことを唯一の楽しみにしているだけで、賭け事にも手を出さず女のことでも家に波風を立てるようなこともない。妻子との生活を秩序正しいものにすることに意を注いできた。

(中略)



そうした生活の中で、俊一の失踪は秩序正しい均衡を乱した行為であり、たとえかれが帰郷してきたからと言って、それを容易に受け入れることは許すべきでなかった。俊一は蜂屋になりたいという。それは伊八郎を中心とした規律正しい生活の中に身を入りたいということの意味しているが、統率者として伊八郎は、俊一に厳格な態度で臨む必要があった。

この引用部から、伊八郎は有島家の長としての自分の振る舞いについて、蜜蜂の社会を参考にしていることがわかる。彼は特に蜜蜂の集団としての秩序正しさについて敬意を表している。また、それと同時に現在の有島家が均衡を失った不完全な状態であることが読み取れる。蜜蜂は有島家の不完全な状態を強調する役割を果たしているのではないだろうか。

『鶴の来る町』で注目すべきは、物語後半部のかね子と運輸省の対決であろう。運輸省及びその周辺組織のかね子たちへの対応は、いたるところに組織としての未熟さを感じさせる。札幌の鉄道局は「ストライキによる損害は不可抗力であるから、こちらに弁償の責任はない」と刀禰吉たちを突っぱねるが、その対応はあまりに非人道的であり、思いやりを感じられない。また、刀禰吉たちとともに蜂の弁償を求める石島という養蜂家の「なすりっこをしちよった」：はじめは、労組へいった。労組がストライキをやったんじゃない、ストライキが荷物をおくらせて、蜂は殺してもたんじゃないから、労組へ呶鳴りこんだら、弁償金は運輸当局じゃといいよる。ほれで、

そこへゆけば、これは、鉄道総局の仕事じゃ、会計課が慣例をみて、弁償金の額面ばきめてくれんことには、払うことが出来んというよる。それで、会計課にゆくと、課長は忙してなかなか会えんというて、今日まで面会謝絶じやと……ええかげんに、腹ばたつてきて、わしや、あの建物に火いばつけて燃やしたい心地がすつと……」という言葉から、運用省が刀禰吉たちにたらい回しの対応をとっていたことがわかる。この場面からも運用省の組織としての不完全性がうかがえる。

この不完全な人間組織である運輸省と対照的に描かれているのが蜜蜂である。『鶴の来る町』では、かね子が刀禰吉たちの養蜂場で蜜蜂を観察し、蜜蜂社会の完全性に感動している場面がある。

蜜蜂とは、男より女性がつよい。女王蜂のためには、働き蜂は献身的である。働き蜂も雌であるが、これは一生交尾することなく働き続けるのだ。もし、女王蜂が病気になるったり、ケガをしたりすると、働き蜂たちは羽音をやすめて心配のあまりにひつそりとなりをしずめる。女王蜂のまわりをかなしみに打ちしおれながら歩きまわる。雄蜂というものは、子のタネを女王にささげるにいたるただけであつて、無蜜期になればすぐに見捨てられてしまう。その上いつまでも生きていると邪魔になるまで働き蜂に巣箱から追い出されてしまうのだというはなしや、働き蜂の習性をみてみると、人間よりも頭脳が発達している。その証拠に集団生活の規律が守られていて、軍隊のように、伝令や、斥候や、分隊長、

大隊長などの職責がきまつているかのように思えるほど整然と行動をしているのが見かけられる。それに、また、友だちに対する思いやりには厚いものがある。もし、かりに、一匹の同僚がクマバチや黄蜂におそわれて、ケガをして地めんに墜ちてもがいていたりすると、すぐに近づいていついてたわりをしめす。そうして、長時間をかけて、巣にはこび、傷のなおるまで介抱するといふのである。

#### (中略)

すべての蜂が、集団のために働くのであった。もとより、一つの巣箱には、一匹の女王蜂しかいないから、すべての労働はこの女王蜂にささげらるものではあるけれども、女王蜂のうみ落す卵がやがて蛹となり、羽根が生え、活動出来る大人蜂になって、家族がふえてゆく姿を見守っていると、人間の世界をみているよりも、楽しく心づよい刀禰吉はいうのであった。

かね子が見た蜜蜂の社会は非常に秩序正しく、素晴らしいものであった。蜜蜂には傷ついた仲間を助ける思いやりもあり、その態度は先に述べた運輸省などの行政組織とは対照的である。また、働き蜂たちがきちんと自分の職責を全うするように働く様子は、運輸省が刀禰吉や石島をたらい回しにする様子と対照的に描かれている。水上勉もまた、秩序正しい社会を構成する蜜蜂を小説の題材に用いることで、それとは対照的な人間社会の不完全性をより際立たせようと試みたのではないだろうか。

『蜜蜂乱舞』と『鶴の来る町』という二つの作品で、作者たちは蜜蜂の秩序正しい社会を構成するという特徴に注目し、蜜蜂を作品の題材に用いることで、それとは対照的な人間社会の不完全性をより際立たせようとしていることがわかった。これが近現代の日本文学作品で、蜜蜂が登場する作品の特徴であると考えられる。それは尾崎の『二月の蜜蜂』にも、そのような特徴がみられるのだろうか。『二月の蜜蜂』には「暫くして煽風は終った。みな、ぞろぞろと中に入つてゆく。と、それと入違ひに一匹の蜂が斃れた同類を引いて出て来た。さうして、一寸身構へたと思ふと、それを腹の下に抱えて、ぶーんと羽音をさせて飛び立つた」という蜜蜂の行動についての描写があるが、これは蜜蜂の社会性について注目した描写であり、ここから尾崎もまた蜜蜂の秩序立った社会に興味を持っていたことがわかる。ただ、これまでに言及してきたように『二月の蜜蜂』のテーマはセイの死であり、人間社会の不完全性はテーマではない。しかしながら尾崎自身は人間社会の不完全性に起因する問題を抱えた経験があった。この事実から、彼もまた蜜蜂社会と人間社会のギャップに注目する視線を持っていたと推測できる。尾崎は蜜蜂社会と人間関係の問題を抱える自分とを比較し、蜜蜂という生物に羨望の感情を抱いていたのではないだろうか。それが、尾崎が『二月の蜜蜂』で蜜蜂を用いた理由の一つなのではないのだろうか。尾崎にとつての人間社会の不完全性に起因する問題とは父との関係である。その問題について、永藤が「尾崎一雄の宗教的感性」<sup>一六</sup>で次のように指摘している。

中学時代のことである。尾崎一雄は、神棚のことにだけはやかましく常に供物、燈明をかかさないと父の助手を毎日つとめさせられていた。彼は神妙に燈明皿の掃除などしていたが「気持は空虚だった」という。そこである日思いきつて母に「神様つてものは、本当にあるのかしら。私にはどうしてさう思へないんだけど」と聞いた。本当は父に向つてそれをぶつつけたかったのだが、氣遣れして出来ずに母に向つて言つたのである。ところが偶然通りかかつてそれを耳にした父が、静かでいてきつぱりした口調で反問した。「お前は本気でさういふことを考へてゐるのか」と。そして「よくは判らないのですけれど…」と言ひよどむ彼に、「軽率な考へを、軽率に口にしてはいけない。よく考へることだ」とのみ言ひおいてたち去つた。そのうしろ姿を見送りながら、「あの父にこんな問題を吹きかけたつて無駄だな。無駄以上に、残酷だな」と考えた彼は、「あの父を追ひつめるのは心ないわさだ、と半ば自分の傲慢に気づき乍ら、腹の中で薄笑ひをうかべた」というのである。

この「薄笑ひ」には意味深重なものがある。単なる投げやりな自嘲でもなく、かといつて父に対する軽侮感に発するひそかな優越感の現われとのみ受けとることも出来ない。確かに、神の問題について正面から議論するなら、父親にでも容易にひけはとらないとの自負が根底には窺える。しかしその自負が、多分に軽率な傲慢さを反映していることにも氣付いているのである。と同時に、

一途な敬神家である父とのありようは、それはまたそれでよいではないかとする思いがあるとみられる。自分はそうなれないという父との異質さを承知しつつ、かといつてそれを誇るのではなく、一抹の淋しさを覚えて微苦笑する——そんな趣きも感取されるのである

尾崎は神道を介して、自分と父との間に決定的な溝があることを感じていたと永藤は指摘する。また、尾崎は大学進学にあつても父親と衝突している。尾崎が「志賀直哉」<sup>七</sup>で述べるには「志賀さんの色々なものを読んでゐたが、志賀さんに会ひにいきたいと思ひだしたのは、早稲田の学院に入つた頃です。これは大正九年です。六年に中学出て、あと九年まで三年間あるでせう。その間は法政大学に入つてゐた。法政なら別に社会主義でもないし何でもないからまあ行つてもいいとおやちに許可をもらつたんだ。「早稲田は絶対にいかん」といふんだ。それは学校騒動が大正六年にあつた、尾崎士郎の「人生劇場」のあの事件ですよ。さういふことでよろしくない学校だと、絶対いかんといふわけです。しかし、とにかくぼくは東京へ出たい。それで、法政ならといふので出してもらつた。けれども学校へはロクに行かずに、大橋図書館へ通つて本読んでたわけですよ。さうしたら九年二月初めに、おやちが死んだ。そこであわてて受験勉強して、学院の第一回を受けたらうまくはひれた」とある。また、尾崎が文学を志すきっかけとなつたのは、志賀直哉の「大津順吉」<sup>八</sup>であつた。「大津順吉」の主題の一つは父との不和

である。尾崎は「志賀直哉先生のこと」<sup>九</sup>で「大津順吉」を読んだときの感動を『大津順吉』は、それまで私が小説と云ふものに対して抱いてゐた感じを一挙に吹き飛ばしてしまつた」と述べている。また、永藤武は前掲論文で「尾崎一雄はこの時なぜ『大津順吉』にそれほど感動したのか。（中略）ここでは、一般的に『大津順吉』の主題であるとされる、父に代表される家という封建秩序との確執とそこからの自立、またそれに付随して宗教（志賀の場合は内村鑑三の影響下でのキリスト教）からの訣別という問題を、尾崎一雄が自分自身の立場になぞらえて読みとり、深く感動したためであると確認しておけば足りるであろう」と述べている。このように父と衝突を繰返し、不和の問題を抱えていた尾崎は、お互いが協調し合つて集団生活を営む蜜蜂に憧れや尊敬の念を抱いていたのではないだろうか。

### 三 「二月の蜜蜂」と大正時代の家制度

本章では、「二月の蜜蜂」が書かれた大正時代の時代背景が、尾崎の「二月の蜜蜂」執筆の理由の一つになった可能性について言及する。「二月の蜜蜂」が書かれた大正時代に、国内で家制度に関する議論が活発化していた。家制度について、渡辺洋三は『現代家庭の法律読本 家庭は変わる 第一巻 男と女の結びつき』<sup>一〇</sup>で次のように述べている。

「家」制度とは、社会の単位を「家」という集団を中心に考え、個人はそれに従属し、その中に埋没する制度のことです。結婚は、個人の自由な意思にもとづくものでなく「家」と「家」のあいだの結婚です。個人が良いことをすれば「家」のほまれであり、悪いことをすれば、「家」の恥となります。このように、すべてが「家」という集団の尺度ではかられます。

この「家」という集団の利益を優先する姿勢は、「巢」という集団の利益のために行動する蜜蜂たちとよく似ている。さらに、大正時代の家制度に関する議論について、渡辺洋三は「大正時代には、民法の改正も大きくとりあげられましたが、「家族制度」賛成の意見もつよく、法律改正はとうとう実現しませんでした。その理由は、戦前の日本の支配者にとつて「家族制度」が必要だったからです。いまの若い人には理解できないでしょうが、むかしの天皇制国家において、天皇陛下がすべての国民の親であり、国民は天皇陛下の子ども（赤子）であるという「家族制度」の考えかたが、国家の支配の原理でありました」と述べ、「家族制度」が当時の社会の基盤であったと指摘している。「家族制度」が横行していた大正時代の日本人にとつて、蜜蜂は自分たちに非常に類似した存在であったといえる。尾崎は蜜蜂に対して、日本人に似ている生き物として親近感を持つており、そのために「二月の蜜蜂」で蜜蜂を用いた可能性も指摘できるのではないか。

#### 四 尾崎一雄にとつての理想の人生と蜜蜂の一生

一章で指摘したように、尾崎の作品を研究するうえで二月の蜜蜂は重要な作品に位置づけられる。なぜなら尾崎はこの作品で、唐戸が前掲論文で指摘するように、「生涯を懸けて追及する、若しくは追求せざるを得なくなった主題」を獲得したからである。つまり、この作品が尾崎の文学活動の根源なのである。そして、唐戸がいう尾崎が生涯をかけて追い求めた主題とは、妹を死に追いやった「無法極まる何物か」の正体を見極めるということであつた。ここで、尾崎はなぜセイの死に強烈な憤りを感じたのか、ということを考えてみる。そこにはセイが二十歳という若さで死んでしまったことが大きく関係していると考えられる。それが読み取れるのは「二月の蜜蜂」の「父の死を思ふ時、私は妹の死から受けるほどのショックを感じない。父が相當の年配であつた故、死に就て自ら考へ、或程度まで自ら解釈し得てゐたらうと思ふのである。父にはあらゆる苦しみを自ら負ひ得る力があつた。然るに、美枝の苦しみは、その総てを私が負はねばならぬ」という部分である。ここでは、他界した尾崎の父親と比べるとセイはこの世を去るには若すぎるという尾崎の想いが表れている。また、尾崎は「あんなに死ぬのを嫌がつてゐたのだ」そして婚約まで出来てゐたのに——かう思ふと私は、その度にカツとなる」と、セイが婚約していた事実を挙げ、セイが母や尾崎の元を離れて一人前の人間として生きていくことも、婚約者と幸せな家庭を築くこともできずに死んでしまったことに

怒りを感じている。ここまでのところをまとめて考えてみると、尾崎はセイが早世のために、人生において何も成し遂げることができずに死んでしまったことを悔しがっており、それこそが尾崎がセイの死に対して憤りを感じた理由であると考えられる。「二月の蜜蜂」に登場する蜜蜂は、人生において何も成し遂げることができなかったセイと比較される存在なのではないだろうか。本稿一章の【場面一】でも引用した、「二月の蜜蜂」での年老いた蜂が巣から追い出される、また彼らは自分たちの子孫によつて噛み殺されてしまうという蜜蜂社会の特徴について再び注目する。作中で「私」は、そのような蜜蜂社会の特徴について記した後、「然し、殺された彼等は兎に角すべきことをして了つてゐるのだ。二十で死んだ妹の美枝は——。私の考へはともすればそこにと落ちて行くのであつた」と記す。つまり尾崎は働き蜂たちについて、彼らの死に方は残酷であるが、彼らは一生のなかで巣のため、子孫のために働くという自分たちの役割を全うしており、なにか成し遂げたものがあるという点でセイと比べるとよりよい人生を歩んだと評価しているのである。それでは尾崎はなぜ一生のなかでなにかを成し遂げるということに強いこだわりを持つていたのか。そこには神道思想からの影響があるのではないだろうか。

永藤は前掲論文で尾崎への神道の影響について、「尾崎一雄にとつて神道は、新たに学ぶべき知的な対象であるよりさきに、所与の生活環境に色濃く生かされていたものであつた。己れの生まれ育ちにさかのぼつて自分という存在を見つめようとする時、神道をぬき

にしては考えられない」と述べており、その影響の多大さを指摘する。また、尾崎と神道の関係については吉田遥<sup>二</sup>も、神道の自然との調和を重要視する性格が尾崎の昆虫作品に影響を及ぼしていることを指摘している。しかし、尾崎が神道から受けた影響は、自然との調和を大切にするという思想のみではないのではないか。先に挙げたように、「二月の蜜蜂」で尾崎は蜜蜂たちの役割を果たして死んでいく姿勢に好感を表す態度を示している。また、「蜜蜂が降る」では「二月の蜜蜂」の頃の自分を振り返り、自分が蜜蜂を観察するなかで得た知識として「中で最も印象深いのは、「蜜蜂は、螫すと共に、刺針を相手のその部分に遺す。したがって、一たび螫せば、蜂自身死ぬのである」と書物にあることを、自分で何遍か、心ならずも体験したことであつた」と述べている。蜂は相手が攻撃してこないかぎり手を出さない。つまり、蜂の攻撃は果や仲間を守るためのものであり、巣という集団のなかで自分の役割を果たす行動の一つであるといえる。尾崎は「蜜蜂が降る」でも蜜蜂の自分の役割を果たして死んでいく姿勢を賛美しているのである。この「自分の役割を全うして死んでいく」姿勢にも神道からの影響があるのではないか。神道の思想は思想家ごとに若干の違いがある。尾崎が最も影響を受けた思想家は誰なのだろうか。「美しい墓地からの眺め<sup>三</sup>」には次のような記述がある。

そう云えば、叔父たちも緒方も、当たり障りない話ばかりしていたのだが、ふと、信仰について誰かが云い出した時、緒方が、「実

のところ、私なんか、どう考えても無信仰ですね」と云い出したのだった。

「わしは、無信仰とは云い切れないが、まあ微温的なものだね。惟神道と云ったって、勉強したわけでもなし、家が昔からの神主だから自然そうだったというぐらいだろう。それだって、おやじの代で止めて、わしは造船屋だからね」「私は、子供の時分から本居だの平田だのと、うちにある本を読み散らかしたんですが、宗教としての切迫感というか、そんなものが、稀薄で、のんきなものだと思います。(後略)」

引用部の「緒方」は尾崎一雄、「本居」は本居宣長、「平田」は平田篤胤を指している。つまり尾崎は本居宣長、平田篤胤の二人から思想的影響を受けている可能性があるのである。安蘇谷正彦は『神道の死生観——神道思想と「死」の問題<sup>三</sup>』で平田の死生観について「篤胤の死後観の特色としては、死後の靈魂が永遠に生き続ける衣食住の具わった世界を信じていたこと。また、現世における人間の行為によって死後の審判を受け永遠の禍福が定まる点にある。とすれば、この世における真の道の実践が、そのままに救いへの道に転換されると確信していたと言えよう」と述べている。また、安蘇谷は様々な神道思想家の考えをまとめたうえで「神道思想家の死の対処法は一応二つに分けられるが、結局神の御魂をいただいて生れた人間は、神の命令のままに、日常生活を努力することによって、死後の安心が得られる、という基本的な考えにまとめられよう」と

述べている。この「日常生活を努力することによって、日々の安心が得られる」という神道思想は、蜜蜂の一生と重なり合うところがあるように思われる。蜜蜂の、特に働き蜂たちの与えられた役割を日々完璧に全うするという姿勢は、「日常生活を努力する」というところに当てはまる。働き蜂は役割を全うした後に死んでしまうわけだが、彼らはきつと、安蘇谷のいう「死後の安心」を手にいれるだろうと尾崎は考えていたのではないだろうか。また、蜜蜂たちの攻撃行動によって死を迎えても、きちんと役割を全うしており、安蘇谷のいう「永遠の禍福」を享受すると考えていたのではないだろうか。つまり、尾崎が蜜蜂を小説の題材に多用した理由として、蜜蜂は神道思想が示す理想の一生を送る生物であったということが挙げられるのではないだろうか。

## 五 尾崎の後期蜜蜂作品において蜜蜂が表すもの

本章ではこれまでと視点を変え、「蜜蜂が降る」、「居据つた蜜蜂」、「だんだんと鬼がつく」、「蜂と老人」などの後期作品において、蜜蜂が題材として用いられた理由について、中勘助の「蜜蜂」<sup>四</sup>を用いて考察する。最初に、中の「蜜蜂」のあらすじを説明する。主人公となるのは中の兄嫁の末子である。末子は脳出血によって発狂してしまった兄を献身的に世話してきた。ところが、そんな生活のなかで末子自身が眼底出血、くも膜下出血、冠動脈閉塞症を立て続けに引き起こしてしまい臨死状態となり、ついには亡くなってしまう。

この「蜜蜂」は兄の世話をし続けるばかりだった末子をいたわる中の気持ちや日記形式で書かれている。末子に対する中の想いが特に現れているのが、次の文章である。

それから稲田先生が奥さんとお出下すつてとにかく一応聴診器をあて、脈をみて下さる。兄も出てきてお話ししているあいだに私は「よく働いてくれました」というと同時に胸がつかえて言葉が出なくなつてしまった。三十三年姉は病兄の世話をするかたわら家大事と身をこつぱいにして蜜蜂のように働いてくれた。そのうえに理不尽に降りかかる敵意と虐待と病苦。四十年の寂寥、四十年の艱難。この人のために泣くならば涙を雨とそいでも足りない。(中略)五月一日 このつぎに出す本は「蜜蜂」という表題にしようと思つています。あなたのことです。よ、蜜蜂が働き死にに死ぬようにあなたは死んだから。かわいそうな蜜蜂！働きつづけて死ぬのは貴いこと、名誉の戦死ともいえるかもしれないけれど、あなたのはいかにも報いも楽しみもないものだった。

末子の夫に対する献身が蜜蜂の労働に例えられている。この作品に表現されているような「蜜蜂」<sup>五</sup>「労働」のイメージはかなり一般的なものであり、中の「蜜蜂」は、蜜蜂が明確に労働のモチーフとして扱われている作品である。ところが尾崎の蜂作品で、蜜蜂が労働のモチーフとして扱われているものは、一見すると無いように思われる。「二月の蜜蜂」は妹の死を扱ったものであるし、後期の

蜜蜂作品も尾崎の老年期の穏やかな心境を表しているものばかりであるように思われる。しかし、先にも述べたように「蜜蜂」Ⅱ「労働」のイメージはかなり一般的なものであり、尾崎がそのイメージを持っていなかったとは考えにくい。尾崎の数多くの蜂作品のどこかに蜜蜂が労働のモチーフとしての役割を果たしているものがあるのではないか。ここで尾崎の後期蜂作品である「蜂と老人」を検証する。次に引用するのはチャボの世話をめぐって、老人が細君への想いを表す場面である。

「生物を飼ふつてのは、これだから厄介だよ」と老人はぶつくさ言ひ出した。老人はしかし、口小言をいふだけで、チャボの世話に手を取られるのは細君の方だ。八十歳に近くなつた老人の達者なのは口だけである。その上に、自分よりも一と廻り齢下だといふことから、細君をいつまでも若いと誤認してゐたのが良くなかつた。細君だつてもう六十半ば過ぎなのだ。

(中略)

卵のことはともかく、チャボが居なくなつたことは、生活刷新の第一歩として成功だつた、と老人は気を好くした。何よりも細君の手を省けたのがいい。かつては不沈戦艦とまで信じ込んだこともある細君が、もはや満身創痍の老朽艦に過ぎぬことを、老人も漸く悟つたもののやうである。

その他にも「蜂と老人」には、細君に関して次のような描写があ

る。

同時に、細君の労を少しでも省かうとの肝があるのだ。長い間の酷使で、細君は今やまぎれもない老朽艦である。省力を謀つて、少しでも長持ちさせねばならぬ

(中略)

屋敷の東北部、つまり入口から見ても、家の裏庭の北寄りに立つ玉グスの南側は、洗濯物の干し場になつてゐる。針金が何本か張つてあり、細君はそこへ小物をかける。大きな干し物は竿を持出してかける。

晴れでさえあれば細君はそのあたりをうろつく時間が多い。タマグスの、一年中絶えぬ洛陽が、最も多く散り敷くのもそこだから、細君が熊手や箒木を朝晩振り廻すのもやはりそのあたりとなる。

「朝掃いて、お午にまた掃いたのに、もうこんなに落ちてゐる」とぼやく細君を、食堂と称してゐる小部屋で煙草をふかしふかし「だからいい加減にすればいいのに」老人は肚でつぶやきながら見てゐるだけで、手助けはしない。

また「蜜蜂が降る」でも「茶菓を供すると向うへ引込んでしまつた妻」、「翌日の午後、駅前の養蜂業下屋の老主人と、三十ぐらゐの息子が、捕獲用具を取揃へてやつて来た。一夜明けても立退きさうにない蜂共の様子を見て、妻が頼みに行つたのである」と、妻の



行動を表す箇所がいくつかある。これらの妻に関する全ての場面で、彼女が家事や雑用に取り組む様子が描かれており、「私」が家事などは妻に頼り切りであることがうかがえる。尾崎は後期蜂作品において、中と同じく家事労働に取り組む松枝を蜜蜂に例えるべく、作品内に蜜蜂を登場させているのではない。尾崎は後期蜂作品において、労働のモチーフとして蜜蜂を扱っていると考えられる。働き詰めに働く蜜蜂を、家事労働する妻を描いた作品の題材に用いることで、読者に松枝と蜜蜂を重ね合わせて作品を読ませ、松枝の働きぶりを「まるで蜜蜂のようだ」と読者に印象付ける意図があったと推測できる。それでは尾崎は、なぜそれほどまでに松枝の労働を強調したかったのだろうか。そこにはやはり当時の時代背景が影響していると思われる。水田珠枝は『女の戦後史』<sup>二五</sup>において、一九七〇年代は女性の就業率が増加した時代であると述べている。水田によれば、これにはアメリカ合衆国で生まれたウーマン・リブ運動の波が日本に訪れたことが影響しており、家事労働に従事するのは女性で、男性ではないという既成概念が破壊されたためであるという。つまり、一九七〇年代とは、旧来の性別役割分業への批判が急速に高まった時代だったのだ。しかし、同時に女性の職業労働について批判的な意見も存在したようである。武田京子は「主婦こそ解放された人間像」<sup>二六</sup>で、次のようなウーマン・リブ運動に対する主婦の意見を取り上げている。

私たちは女としての教育しか受けてこなかった。家事、育児以

外に能がない。資格も技術もない身で職を持てといわれても、単純労働のパートタイマーがせいぜいだ。そんなものに生きがいを感じられるわけではないし、その程度に仕事を持ったことで、家庭内で夫と対等の立場に立てるわけではない。経済力とか社会的地位とかいったことで張り合ったら私たちと夫とは月とスッポンだ。となると、相手ができないことで、自分の価値を認めさせるしかない。家事、育児、そして女らしさ、それだけが自分たちの存在価値をしめす最高の武器にならざるをえない。

つまり、この時代には女性が専ら家事労働に従事することを肯定する意見も存在したのである。尾崎の後期蜜蜂作品が書かれたのは一九七五年から一九七九年であるが、この時代にはまだ武田の文章で取り上げられたような、家事労働に従事する女性の生き方を支持する人も多かったであろう。尾崎もその一人だったのではないだろうか。だからこそ家庭内のことは松枝に頼り切りであったのだろう。そして、そんな尾崎が妻の家事労働を強調して描くということは、尾崎は自分の妻が女性として優秀であるということを読者にアピールしたかったのではない。尾崎にとって松枝は特別な存在であった。唐井の前掲論文でも指摘されているように、尾崎は昭和十九年の大戦末期に病で倒れてから、松枝の介護に頼って生きてきた。また、唐井は前掲論文で、尾崎が松枝と結婚してから精神的安定を得て、志賀直哉の模倣に走りすぎたために引き起こした作家としてのスランプから抜け出すことができたことと指摘している。尾崎によつ

て松枝は誇るべき細君であり、松枝の女性としての優秀さを表現するために、尾崎は松枝が家事労働に従事する様子を強調して描いたと考えられる。

## おわりに

本稿では尾崎一雄が小説の題材に蜜蜂を多用した理由について考察してきた。尾崎は蜜蜂に対して多角的な視点を持つており、彼が蜜蜂を作品に用いたのにはさまざまな意図があつたことだった。尾崎の師である志賀も昆虫や小動物を作品の題材に用いたが、尾崎の昆虫たちに対する視点は志賀よりもより多角的なものであ

つたのではないだろうか。もしそうであるなら、これまで研究がなされてきた尾崎の蜜蜂以外の昆虫を扱った作品についても、さらに研究の余地があるのではないだろうか。尾崎の昆虫作品を理解することは、そのまま尾崎一雄という作家を理解することにつながる。尾崎一雄に関してはこれまで盛んに研究が行われてきたとは言えない。しかしながら、尾崎が大正から昭和期にかけて活躍した私小説作家として重要な立ち位置にすることは間違いなく、この時代の私小説というものを理解するためにも、尾崎作品の研究は進められるべきである。

- 一 尾崎一雄「虫のいろいろ」『新潮』一九四八年一月
- 二 尾崎一雄「二月の蜜蜂」『新潮』一九二五年四月
- 三 尾崎一雄「蜜蜂が降る」『新潮』一九七五年一月
- 四 尾崎一雄「居据つた蜜蜂」『神奈川新聞』一九七五年六月九日
- 五 尾崎一雄「だんだんと鳥がつく」『新潮』一九七六年一月
- 六 尾崎一雄「蜂と老人」『新潮』一九七九年一月
- 七 渡辺孝「ミツバチの文学誌」筑摩書房、一九九七年五月
- 八 唐井清六「『蜂と老人』尾崎一雄」『国文学解釈と鑑賞五四巻』一九八九年四月
- 九 唐戸民雄「尾崎一雄〈独自性〉の獲得——『二月の蜜蜂』と『暢気眼鏡』を中心に——」『立正大学国語国文学会』二〇〇一年
- 一〇 芥川龍之介「老いたる素戔嗚尊」『日本現代文学全集五六』講談社、一九六〇年二月
- 一一 『新編日本古典文学全集五一 十訓抄』小学館、一九九七年二月
- 一二 『日本の詩 宮沢賢治』ほるぷ出版、一九七五年二月

- 一三 尾崎一雄「志賀直哉」『海』一九八六年九月
- 一四 水上勉「鶴の来る町」文藝春秋新社、一九六五年
- 一五 吉村昭「蜜蜂乱舞」新潮社、一九八七年
- 一六 永藤武「尾崎一雄の宗教的感性」『神道宗教』一九七九年九月
- 一七 尾崎一雄「志賀直哉」『海』一九七七年八月
- 一八 志賀直哉「天津順吉」『中央公論』一九二二年九月
- 一九 尾崎一雄「志賀直哉先生のこと」『新女苑』一九四〇年二月
- 二〇 渡辺洋三「現代家庭の法律読本 家庭は変わる 第一巻 男と女の結びつき」岩波書店、一九八七年二月
- 二一 吉田遥「尾崎一雄研究——戦後の虫に関する作品から見た死生観（上）——」『富大比較文学』二〇一三年二月
- 二二 尾崎一雄「美しい墓地からの眺め」『群像』一九四八年六月
- 二三 安藤谷正彦「神道の生死観——神道思想と『死』の問題」一九八九年六月〇日、ペリかん社

二四 中勘助『蜜蜂・余生』筑摩書房、一九四三年

二五 朝日ジャーナル『女の戦後史』朝日新聞社、一九八五年二月

二六 武田京子「主婦こそ解放された人間像」『婦人公論』一九七二年四月